『西南アジア研究』No.40, 1994

ラシードゥッディーンの著作活動に関する近年の研究動向

岩　武　昭　男

ラシードゥッディーン・ファドゥルッラー・ハマダーニー Rašīd al-Dīn Faḍl-allāh Hamadānī(以下,ラシードと記す)の著作活動に関しては,1836年の É. Quatremère の研究に始まり,『集史(*Ǧāmiʿ al-Tawārīx*)』に対する関心の高さから,これまで様々に分析されてきた。しかし,ヨーロッパにおけるオリエント研究において最初期から扱われているテーマにもかかわらず,未だに多くの未解明の問題を残しているといわざるをえない。これまでの我々の知見は,E. G. Browne [1908 ; 1928 : 68-87] の解説や W. Barthold [1928 : 44-48] の簡単ながらも重要な解題を経て,1960年代に相次いで発表された A. Z. V. Togan [1962 ; 1964] や K. Jahn [1964] の研究によって形成され,両者の研究に基づいた Yu. E. Bregel [1972 : 301-320] による C. A. Storey のペルシア語文献誌の増補ロシア語訳によって,一応の「定説」が形成されたといえる。

我が国においては,本田實信氏が上記の Togan, Jahn, および Bregel の研究を批判的に紹介し,ラシードの全著作の検討と伝記資料の収集を,『集史』研究と並ぶ今後究明されるべき課題として提示されている[本田 1984]。これまで,ラシードの著作活動の研究は,モンゴル支配期に特徴的な東方からの知識の流入だけが強調され,イスラム世界の中での活動としてはほとんど分析の対象とはなってこなかった。しかし,既に本田氏はイルハン期イランにおける,モンゴル=イラン=イスラムの3要素を強調しておられ[本田 1969],本来,この「イスラム」の問題を考察しない限り,『集史』の総合的な理解は得られないはずであり,もとよりイスラム世界史およびイラン史におけるイルハン期の特質を明らかにしえないはずである。

このような状況は,日本のみならず,上記の「定説」の形成期の欧米の学界においても同様の問題点であったといえるが[1],1980年代にはいって,3人の研究者が,一人は思想史の方向から(Josef van Ess),二人は美術史を出発点として(Sheila S. Blair と David James),

ラシードの著作活動の研究に関する新たな枠組みを提出している。本稿は,前者の研究を主に採り上げ,その紹介と批判を通じて現在の研究の到達点を確認するとともに,上記の問題関心から新たな研究の方向性を探ることを目的としている[cf. 岩武 1991：146-47]。もとより筆者は,イスラム思想史・美術史に関して極めて乏しい知識しかもたないが,ここに紹介する研究の成果は,我が国においては勿論,欧米においても,イルハン期イラン史およびモンゴル帝国史の歴史研究にほとんどフィードバックされていない。筆者の知る情報をも記していき,この紹介を通じて現在残されている問題を解明する手掛かりを提示できれば幸いである。

Ⅰ. van Ess 1981. 本書の著者 van Ess はイスラム学における思想史の著名な研究者であり,本書は,本来,イスラム神学・思想史研究,またシーア思想史を中心とするイラン思想史研究の領域の中で評価されるべきではあろうが,特に評者(以下,岩武)が関心を持つ上述のようなラシードの著作活動の問題に係わる点に関しても重要な貢献をなしており,以下では,そこで提出された情報の整理の作業を行っていくことにする([ ]内に本書のページ数を示す)。

本書の構成は次のとおりである。序章 伝記的背景.ラシードゥッディーンの神学著作とその taqrīẓāt の動機に関する考察[1-11]。第1章 *Maǧmū'a* の4大論文集[12-21]。第2章 taqrīẓāt リストA/リストB[22-38]。第3章 神学・学術論文の新たな論文集,*K. Bayān al-ḥaqā'iq*[39-42]。第4章 ラシードゥッディーンの学術問答集：*As'ila va aǧviba*[43-54]。終章 上記著作の編年と意義[55-60]。人名索引[61-68]。

本書は,ラシードの神学著作の内容の紹介と編年の確定を目的としていることがその副題で提示されているが,直接的には,現在知られているラシードの神学著作のすべて,すなわち,*Maǧmū'a al-Rašīdīya (Tauḍīḥāt, Miftāḥ al-Tafāsīr, Sulṭānīya, Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* の4神学論文集の集成),*Bayān al-Ḥaqā'iq, As'ila wa Aǧwiba* のうち,前二者収録の各論文の内容紹介(第1章・第3章),さらに,*Maǧmū'a* にタクリーズ(taqrīẓ. 複数形：taqrīẓāt, taqārīẓ)[2]を献じた学者たちのリスト化(リストA=88名・B=27名：第2章)と *As'ila wa Aǧwiba* の質問者のリスト化(リストC=59名：第4章)を,その主たる内容としている。本書のタイトル『ワズィールと彼の学者たち』は,このリストゆえのことと理解される。

ここで扱われる神学著作の前二者は,いわゆるラシードの『著作目録』の第1部(qism)第1部門(bāb)および同第2部門第1書(kitāb)に登録されていたものである。この『著

作目録』と一般に呼ばれるものは，*Maǧmū'a* およびその収録論文集の幾つかの写本の前書きとして記載されたものであり，710/1310-11年書写の *Maǧmū'a* のパリの国民図書館所蔵写本にもとづき，既に Quatremère が校訂を出版している [Quatremère : cxlvii-clxxv][3]。その前書き自体は，1．導入部分 [cxlvii-cxlix]，2．*Ǧāmi' al-Taṣānīf al-Rašīdī*（『ラシード著作全集』）内容目次 [cxlix-clxi]，3．『ワクフ文書』補遺「写本作成指示書」の写し [clxi-clxxv] の構成になっており，『著作目録』はこの2の部分をいったものである。このうち，3の部分に関しては，Browne [1928：77-79] によって，英文の概要が示されているが，各著作のアラビア語版とペルシア語版の両方を作成されることが注目されている以外，これまでの研究にはほとんど考慮されてこず，『著作目録』は掲載の著作の書名だけが問題にされ，本書を含め，これは著作計画に過ぎないと目されてきている[4]。一方，*As'ila wa Aǧwiba* は，この『著作目録』に掲載されておらず，それ以降の編纂にかかる。『ワッサーフ史』には，712年初頭（1312年5月）までに10巻からなる著作集（muṣannafāt）が編纂されたことが明記されている [TW / txt：538-39] がそこには掲載されている[5]。

著者は，このような網羅的な内容紹介，タクリーズを献呈した学者たちのリスト化のために，著者が参照しえた現在知られている限りの写本を調査している。特にイスタンブル所在の写本では，Bregel 1972に提示されていないものもある[6]。著者の写本の渉猟により，情報の蓄積は一挙に拡大され，本書の最大の貢献ともいえる。ここではラシードの同時代の写本で，特に著者が共通の大判の判型であると注記しているものに限りまとめておくことにする。

Maǧmū'a [Paris] Bibl. Nat. 2324（アラビア語版）[12-21]

Quatremère 1836および本書第1章・第2章での主たる分析対象。710/1310-11年書写（論文により707,709年の日付を含む）[7]。書写生：Muḥammad al-Amīn b. Maḥmūd b. Muḥammad Zūdniwīs al-Baġdādī[8]。著者の経験の中で最も豪華。黒・赤・青・金の4色で書写。

Sulṭānīya [Istanbul] Nuru Osmaniye 3415（ペルシア語版）[34]

書写生：al-Ḥusain b. Maḥmūd（Niẓām al-Ṭūsī）= A 19[9]。

Bayān al-Ḥaqā'iq [Istanbul] Kılıç Ali Paşa 834（アラビア語版）[39][10]

711年ラビーⅠ月24日（1311. 7. 31.）書写。書写生：Muḥammad b. Sa'īd al-Isfarā'inī[11]。

As'ila wa Aǧwiba [Istanbul] Ahmet III 1930（アラビア語版）[43, 45]

715年ラビーⅠ月10日（1315. 6. 14.）書写。書写生：'Abd al-Ǧalīl= A 41（？）

これら以外に著者は7つの同時代写本を確認しているが[12]，上記4写本が共通してもつ判型は，後述のごとくラシードのワクフ文書の規定に従ったものと考えられ，極めて重

要である。

著者は，これらの写本の調査に基づき，神学著作の著作の編年を以下のように結論付ける［8-11, 57-59］。

705年（1305. 7. 24. -1306. 7. 12.）中	*Tauḍīḥāt* 論文執筆開始（706年中に集成）
706年ラマダーン月（1307. 3. 6. -4. 4.）までに	*Miftāḥ al-Tafāsīr* 集成
706年ラマダーン月から同年末（-1307. 7. 2.）までに	*Sulṭānīya* 完成
708年（-1309. 6. 10.）以降	*Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* 集成
709年（1309. 6. 11. -）-710年（-1311. 5. 19.）の間	*Bayān al-Ḥaqā'iq* 集成
710年（1310. 5. 31. -1311. 5. 19.）以降	*As'ila wa Ağwiba* 問題提出
711年（-1312. 5. 8.）中に	*As'ila wa Ağwiba* 集成
712年（1312. 5. 9. -）	全体の集成完了[13]

この間に，707年にタクリーズの献呈を受け，また，710年には，*Mağmū'a* のパリ写本が完成しており，したがって，『著作目録』もこの時点で成立していたことになる。

神学著作には，オルジェイトゥ宮廷でのエピソード，ラシードの自伝的な個人情報，『集史』編纂に係わる情報等が豊富に含まれており，このように確かな形での編年を行うことによって，それらの情報を利用することが可能になる。

本書の分析を通じて，著者がラシードの神学著作に対して下した結論は以下の3点にまとめえる。

i．引用する先行研究はガッザーリー程度に止まり，ラシードが神学研究においては「門外漢（Außenseiter）」に過ぎなかった。

ii．これらの著作とタクリーズを集める作業は，ユダヤ系出自への反感に対抗するために自身の正統信仰を立証するためのものであった。

iii．*As'ila wa Ağwiba* においてシーア派学者の参加が増大しており，710年のオルジェイトゥのシーア派への転向との関連が窺われる。

これらの結論への評価は後に述べることとして，著者が分析・紹介するこれら神学著作における情報のうち，特に重要と思われるものをまず次の4項目に従ってまとめておきたい。

一）研究史に係わる事項

1）Muginov 説の批判：旧レニングラード所在の *Sulṭānīya* ペルシア語版の写本は，715年に書写されたもので，その中に見られる707年シャウワール月の日付は，アブドゥルアズィーズ・ケルマーニーのタクリーズおよび補遺執筆の日付であり，『著作目録』の成立

の日付とは関係を持たない[17(n. 24)][14]。

したがって, Muginov [1958 ; cf. 本田 1984：73] によって出されJahn [1964：114, 116] によって一部受け入れられた, ペルシア語版『著作目録』および4巻本『集史』を含む主要著作が706年までに書かれていたとする錯綜した説は, 根拠を失うことになる。

2) Togan 説の批判：Togan [1962：63-64] は, *Sulṭānīya* のペルシア語版の序言の一節を「この弱き僕が, *Kitāb-i Ǧāmi' al-Tawārīx, Tauḍīḥāt, Miftāḥ al-Tafāsīr, [Fawā'id-i] Sulṭānīya,* 数冊の別の書を, モンゴル語で (čand kitāb-i dīgar [dar] Muġūlī), 彼の祝福された名によって完成させたとき」と読み『集史』がまずモンゴル語で書かれたという説を展開した。Togan もアラビア語版 ([Istanbul] Tarhan Hadice Sultan 325) を参照しているはずだが, van Essは上記の「モンゴル語で」の箇所が「別の書」だけを修飾することをアラビア語版からテキストを提示したうえで明確に示し, Togan説の根拠を完全に喪失させた [18(n. 26)]。

なお, ここで, ラシードが「モンゴル語の書」を自ら書きえたことが改めて確認されたことも重要であろう。

二)『集史』の編纂に関する事項 (以下の項では著者の挙げる *Maǧmū'a* パリ写本 [Paris] Bibl. Nat. 2324の葉数をも [ff.] 内に挙げる)

1) *Tauḍīḥāt* 序文 [ff. 54b-56b] にラシードが, 自身のワズィールの職にもかかわらず, 『集史』を, まず1巻, 次いで新たな2巻, 完成することができたとし, その後にコーラン注釈書を書けとのオルジェイトゥの命が届いたと述べている, という [13]。

著者は, これらがどの部分を意味しているのかは, 研究課題として留保している [58]。『著作目録』での『集史』の第4巻に当たる「地理書」に関しては, D. Krawulsky の非存在説 (注4参照) を引きながら判断を保留しているが [2 (n. 7), 6], その第3巻に当たる「系譜集」に関しては, 以下の記述を提示している。

2) *Tauḍīḥāt* 第12論文 [ff. 135a-137a] でラシードは, 自身の『集史』にトルコ部族の系図を描いており, 後に, 預言者の家系に関しても同じものを計画した, という [14]。さらに,

3) *Sulṭānīya* 結びの部分 [ff. 264a-277a] では, 預言者たちの歴史とアッバース朝・ファーティマ朝の終焉までのイスラム史, およびそれに対応する系図, が描かれている [19][15]。

ここで, 著者は, 第3巻「系譜集」は, 現在改定された版 (現存の *Šu'ab-i Panǧgāna*) に保存されているとし, *Sulṭānīya* 記載の系図をその「系譜集」に至る中間段階に当たるかもしれないとしている [14 (n. 14)]。すなわち, 著者は, 「系譜集」の存在を前提とし, それが707年以降 (上述の編年での *Sulṭānīya* 完成以降) に完成したことを示唆していることにな

る[16)]。

4)*Bayān al-Ḥaqā'iq* 序言(第1論文)([Istanbul] Kılıç Ali Paşa 834, f. 50aff.)の記述において,ラシードは,709年ジュマーダーⅠ月14日(1309. 10. 20.)に行われたオルジェイトゥとの問答を「オルジェイトゥ史」に組み入れようとしている,という[40]。この時点で,「オルジェイトゥ史」が計画段階として存在したことを示す記述である。

ただし,本書での提示は,原文を例示することなく著者による写本からの要約に止まっているため,今後,これらの事項の確認のためには,改めてその写本を参照する必要があるであろう。

三)ラシードの個人情報に関する事項

1)*Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* 第1論文[ff. 288b-290b]は,*Risāla Aḥwāl Faḍl-allāh* の表題を有し,ラシードの自伝情報を提示している。著者は,ここでは,ラシードが既にアルグンと医学上の問題で討論していた記述のあることを示している[19]。

2)*Sulṭānīya* 序言[ff. 207a-213b]では,オルジェイトゥによる質問に答える中で,ラシードがメルヴとサラフスの間の砂漠のどこかでオルジェイトゥが誕生した際にその場にいあわせたことを述べている,という[18]。

3)先に二)4)で示した *Bayān al-Ḥaqā'iq* 記載の709年ジュマーダーⅠ月14日(1309. 10. 20.)の討論のとき,ラシードは62才であったと述べている,という。著者は,次の4)に示す情報と併せて,ラシードの生年は,647-48/1249-50年となり,Togan 1964:705等で一般にいわれている1248年という説を修正できると結論づける[40]。

4)*Bayān al-Ḥaqā'iq* 第19論文([Istanbul] Kılıç Ali Paşa 834, f. 261bff.)では,ラシードは青年期より関節リューマチ(wağ' al-mafāṣil)に苦しみ,62才である710年の今まで苦しんでいたと個人的な情報を記述している,という。また,膝と右手に痛風を患っていたともいう。この関連で,トルコ人がもつ治療法に関する関心が記述されているようである[Togan 1964:711][42]。

5)*Tauḍīḥāt* 第9論文[ff. 118a-128b][14]で語られる,ラシードが自身の神学論文を批判され,その批判者への対応としてタクリーズを集めたことは,既に Quatremère[1836:cxx-cxxx]により紹介されていたが,改めて本書の序章にまとめられ[8-10],著者はその論争の影響を様々な収録論文に見て取っている[特に35]。

四)オルジェイトゥ関連の事項

1)ラシードとオルジェイトゥの神学上の討論,オルジェイトゥが学者を集めて行った討論会に関しては,様々な収録論文に記録されている。特に,*Bayān al-Ḥaqā'iq*, *As'ila wa*

Ağwiba には，日付と場所が明記されている場合が多く，709年から711年にかけてのオルジェイトゥの所在を確定する明確な根拠となろう[17]。オルジェイトゥ関連の事項としては次の1点を挙げるに止める。

2）*Bayān al-Ḥaqā'iq* 第2論文［上記写本，f. 56 ff.］（『著作目録』では*Naṣīḥat al-Sulṭān* の表題が付けられている［Quatremère : clv］）に，オルジェイトゥが，709年シャウワール月11日（1310. 3. 15.）のイルハン朝創立記念祭（? Gründungsfest der īlḫānidischen Dynastie）の接見の際，モンゴル人のアミールたち（Fürsten）に「シャリーアと理性とヤサにふさわしいように（'alā wağhin yulā'imu al-šar' wa'l-'aql wa'l-yāsāq）」生きなければならないと訓じた，という記述があるという。Togan［1964：711］による紹介が確認されたことになる［40］。シャリーアとヤサの統合は，ガザン以降のイルハン政権における特質として，本田氏が描き出した図式であるが［特に本田 1969］，イラン・中央アジアを統治したトルコ=モンゴル系諸政権の特質としても重要な事項であろう。

以上，本書が示す重要と思われる情報を4点に分けて整理してみた。もちろんこれら以外にも興味深い記述は多々あり，さらに著者の提示していない情報が神学著作そのものの中に含まれているであろう。また，リスト化された学者たちの中には，クトゥブッディーン・シーラーズィーQuṭb al-Dīn Šīrāzī（= A 1）やアッラーマ・ヒッリー 'Allāma Hillī（= C 9）を初めとする著名な学者やラシードを取り巻く環境を考える際に極めて重要な人物たちを含んでいる。本書は，人名索引も付けられており，これらのリストを検索することによって，当時の思想状況だけでなく，人的な交流も確認することができるであろう［cf. 56（n. 8）］。

Jahn［1982：356-57］は，本書の書評において，タイトルに関連して，単に「ワズィールと彼の神学者」に過ぎないとしている。冒頭にも記したように，確かに世界的な知識の流入がラシードを中心として生じていたことは重要なことであるが，最も根本的な学問の場，人的交流の場の解明がこれまで等閑視されてきたことを考えれば，この非難は不当といわざるをえない[18]。

ただし，本書はJahnも述べるごとく今後解明して行かなければならない，多くの問題点をも提起している。上述の著者の下した結論に関しても，次のような留保が必要であろう（上述の本書の結論に対応させて番号を付す）。

i．ラシードが「門外漢」であったとの評価は，その通りであったかもしれないが，先行研究への注釈を積み重ねて行く形での学問伝統から離れて新たな思想動向を生み出しえたという積極的な評価も可能であろう。ラシードが先行研究を引用しなかったのは，敢え

て採った立場とも解釈しうる[19]。著者も，特に *As'ila wa Ağwiba* に収録された59名の当時の著名な学者からの神学に関する質問状がペルシア語で書かれていたことに触れ，新しい時代の精神をそこに見ている[45]。

iii. 上記のことに関連して，シーア派の影響の拡大はオルジェイトゥの傾倒以外にも要因があったことが予想される。オルジェイトゥのシーア派への改宗派自体にも未だ不明確な部分が存在する[cf. 岩武 1992：80(n. 49)]。ラシードが反シーアの立場を採っていたことは間違いないが[19-20；cf. 岩武 1992：61]，オルジェイトゥ時代にはいってのラシードと特にアッラーマ・ヒッリー等との交流[42, 47-48]の分析を進めれば，シーア思想形成に関する新たな像を描き出せるかもしれない。

ii. ラシードがリスト A に示される87名（1写本にのみ A_4 88が記載される[33]）のタクリーズを集めたのは，ラシード自身が記すように対立者との論争に起因していた。しかし，ユダヤ人問題は史料上の裏付けのないまま特にヨーロッパの学界で強調され過ぎる傾向のある事項である。さらに問題となるのは，当時の状況におけるタクリーズの位置付けであろう。F. Rosenthal[1981]は，14世紀末のエジプトで或る詩論に献じられた11のタクリーズを分析してイスラム世界の「出版」事情におけるタクリーズの位置付けを試み，その大多数は何らかの著作の著者が自作の受け入れへの好環境を創出するために自ら集め「出版」と同時に編纂したものであったと主張している[Rosenthal 1981：178]。彼が分析した11のタクリーズの中には，後にエジプトの学界・司法界で権力をもつことになるイブン・ハジャル Ibn Ḥağar の最初の作品となるタクリーズを含んでおり，著者からの直接の依頼なしに自身の学界へのデビューのために書いたのではなかったかとの仮説を出している[Rosenthal 1981：184-85]。タクリーズは，イスラム世界の中で一つの文学ジャンルともなっていたようであり，タクリーズのみを集めたタクリーズ集も一つの作品として成立している[Rosenthal 1981：178]。イスラム世界でのこのような著述，出版，読書の環境を前提とし，ラシードが当時の最高権力者であったことを考えれば，自ずから違った像を想定できよう。ただし，Rosenthal が分析した例は，ラシード以降のものであり，タクリーズを含めたイスラム世界における「出版」環境とその歴史的変化の研究は Rosenthal も述べるようにこれからの研究に大きくかかっている。

このような文化的な背景への配慮の不足にも関連して[20]，評者は，本書の最大の問題点として，ラシードの『ワクフ文書』が極めて不十分にしか利用されていない点を挙げておきたい。本書は，『ワクフ文書』の校訂版が出版されてから間もない時期に発表されているにもかかわらず，積極的に史料として用いようとしているが，それが有効に利用されて

いるとは言いがたいのである。

考察の対象となるのは，その補遺部分の「写本作成指示書」とも呼びうる記述である。これは，校訂が基づいた原文書と写本のアマルガムでは，それぞれ断片で写しながらも2通存在していて，今便宜的にテキスト1 [WRR / ms：293-96]，テキスト2 [WRR / ms：325-44] と分けると，校訂版ではテキスト2に基づいて一つにまとめられている（テキスト1の相違箇所は "nusxa-yi dīgar" として欄外注に挙げられている）[WRR / txt：237-52]。先に示した『著作目録』に続いて提示されている，その写しのQuatremèreのテキストのアラビア語版とは，テキスト1がアラビア語とペルシア語の言語の差を除いてほぼ完全に一致し，テキスト2には多少の書き換えが存在する。これらには書写すべき著作の指示リストが掲載されており，テキスト2ではこれが *As'ila wa Ağwiba* を含め2書分増補されている。テキスト1がテキスト2に先行することになる[21]。

このテキストの分析によりラシードの著作活動をより広い範囲で明らかにすることができるはずであるが，著者は，『ワクフ文書』では失われた部分を注記せずにQuatremèreのテキストから引用し[4，ll. 19-21]，さらに「710年の原テキスト」の写本作成を指示するリストでは *Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* を越えないと述べる[59]。実際は，テキスト1でも写しのテキストにおいても *Bayān al-Ḥaqā'iq* が掲載されているのである[WRR / ms：293；Quatremère：clxvii][22]。

何らかの作品分析を行う際に，他の要素を捨象してその内容のみを対象とすることは，いわゆる思想史の領域に共通のある種の限界といいえるが，本書は，写本の形態に留意して内容以上の考察は行っているものの，それを生み出す文化的状況や物質面での考察にまでは配慮がなされていない。しかしながら，本書はラシードの著作活動に関し，思想史の領域のみに止まらず必読の文献といえるだろう。

Ⅱ．Blair 1984,1993；James 1988． van Essの研究では重要視されていなかった写本作成の現場の状況――そこから生み出された写本に基づくものを我々は見ている――は，これまでも美術史の領域では関心が払われていたが，上述の『ワクフ文書』の記述に関して，近年ではS. S. BlairとD. Jamesの論考が特に注目される。Blairの論考の前者[1984]は，ラブエ・ラシーディーの構造と機能を明らかにすることを目的とする『ワクフ文書』を初めて本格的に分析した建築史の観点からの研究である（ただし『書簡集』を史料として用いることを避けているため[23]施設の明確な像を提示しているとはいいがたい）。後者[1993]は，挿絵としてのミニアチュールの書物に占める位置がイルハン期に変化した

ことを論じた美術史の論考である。Blair によって,改めて注目されたのは,写本作成に用いる用紙として『ワクフ文書』に規定されていた「バグダード紙大判」という紙のサイズである[24]。Blair は前者の論文において,ラブエ・ラシーディーにおいてコーランも同じ紙で作成されていることをも示している[1984：81-82]。

ちょうどこの論考が発表された時期に,マムルーク朝期・イルハン朝期のコーランの収集,分析を進めていた James は,ラシードのために作成された大判のコーランを発見し[25],さらにその成果をまとめた James 1988において,それ以外にもイルハンのために書写された同型のコーランを紹介している[Cat. no. 39, 42, 45]。James の研究により,内容でなく純粋に写本の形態が問題となる点でこれまでの研究では扱われることが少なかったコーランの写本がイルハン期に関しても概観できるようになった。

Blair の後者の論考は,James の示す大判のコーランの判型の平均が53×38cmであることを参考に,ラブエ・ラシーディーで作成された写本として,ほぼ同じ判型の *Maǧmūʿa* パリ写本や上記のコーラン,『集史』を含む6写本を認定している[Blair 1993：269][26]。Blair の物質面での考究により,良写本判別のための一つの指針が与えられたといえる[27]。ただし,Blair もやはり van Ess 1981を参照しておらず,神学著作の上述の3写本を加えることができることになる。

これらの情報によりラシードのワクフを通じての意向が確かに実行されていたことが改めて確認されることになり,『ワクフ文書』のより完全な内容把握が課題として浮かび上がってきている。

本稿で紹介した研究から読み取ることができるのは,ラシードという生きた作者の姿であり,その作品の成立と流布を保証したイスラム世界の環境であった。近年の諸研究は,それぞれ不備な点もあり,決して確定された解答を提出しているわけではないが,これらの研究を立脚点にすることによって,新たな理解が可能になるであろう。

注

＊アラビア語・ペルシア語の提示に関しては,本稿での統一を優先し,引用する際にも元の研究の表記を基本的に変更して提示する。

1） ToganやJahn ばかりでなく,それ以降の Morgan にも共通している[cf. Morgan 1982]。Morgan [1986：20(邦訳：259), 21(n. 15)]は,ラシードの神学著作に関して,本稿で紹介する van Ess 1981を引きながら「重要というよりは正統的なものである」と述べるが,これは van Ess の結論と

は矛盾している。

2）「タクリーズ」の語は，辞書上 "qaraẓa" II 型「称賛する」の動名詞であり，特に，何らかの著作に献じられた称賛の辞を意味する。著者は，この語を特に定義せずに用いているが，本書の記述から，ほぼ「内容証明書」のようなものを想定していることが判る。ただし，本書の出版と同年に発表された，このタクリーズを扱った Rosenthal の論文[1981]では，"blurb"「自賛広告」(日本の出版事情に即せば，新刊書の帯に書かれる「推薦の言葉」に当たるであろうか)という現代の出版事情に引き付けた訳語をあえて用いており，この点は後に検討することにする。

3）Muginov 1958掲載の *Sulṭānīya* ([旧 Leningrad] 3929 (C375)) 中のペルシア語版およびそのロシア語訳(部分)，Jahn 1964掲載の *Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* ([Istanbul] Aya Sofya 3833) 中のペルシア語版(部分)，*Tauḍīḥāt* ([Istanbul] Ahmet III 2300) 中のアラビア語版をも参照した。ここに見られるように，この箇所は *Maǧmū'a* 全体および収録の各論文集の写本につけられており，個々の著作の序文ではなく，その写本につけられる前書きと考えられる。なお，Ahmet III 2300は，van Ess [1981：37] によって，714年ラマダーン月 4 日 (1314. 12. 12.) に Yaḥyā b. Qutlū b. Muḥammad なる人物の依頼により Aḥmad (？) b. Muḥammad b. Abū Bakr al-Ṭastī (？) なる人物によって書写された同時代の写本であるとされている。この写本の前書きは，宇野伸浩氏が将来されたマイクロフィルムを見ることができた。記して謝意を表したい。また，以下の記述で写本の番号を記述するときには，[所在地] 登録ナンバーの順で提示する。

4）本書においては "Gesamtplan" と提示される [5 - 6. cf. 本田 1984：74]。問題視されているのは，この『著作目録』記載の『集史』(第 2 部第 1 部門) が 4 巻として記載されているからである (第 1 巻 (muǧallad) トルコ・モンゴル史，第 2 巻 オルジェイトゥ史・イラン=イスラム史・世界民族史，第 3 巻 系譜集，第 4 巻 地理書)。一方，『集史』序文では，第 3 巻が地理書 (Bayān-i Ṣuwar al-Aqālīm wa Masālik al-Mamālik) の 3 巻として記載されている [ĠT I ： 16-17, 39] ことから，Togan が発見した *Šu'ab-i Panǧgāna* [cf. Togan 1964：710 ; Jahn 1964：119] を系譜集の写本とすることに疑義が呈され [本田 1984：74 ; 杉山 1987：29]，地理書に関してはその写本が未発見であるところからその実在を疑問視する説 [Barthold 1926：293] も根強い (反論として Togan 1934：525 (n. 29) ; 1962：62 (n. 5) ; Jahn 1964：119-21が提出されているが，近年では Krawulsky [1978：26f.] がその非存在を主張している)。ここではこれらの問題に関して詳論することを避けるが，本書は有力な手掛かりを提示することになる。

5）"As'ila wa Aǧwiba-yi Mutafarriq"。そこでは書名ではなく内容を説明する形で著作集収録の各著作が上げられており，系譜集，地理書も含まれていることが確認される。ただし，『ワッサーフ史』の文体の難解さに加え，我々が一般に参照する，学術的な校訂を経ていない石版ボンベイ版 (に基づく版) のテキストは，意味の通じえない箇所を多々含んでおり，このためこれまでの研究では十分に分析されることはなかった。『ワッサーフ史』の記述に基づき，712年に至って『集史』

の「オルジェイトゥ史」が完成したとする説が提出されているが[Jahn 1964：119；Bregel 1972：305]，この説も Quatremère[1836：lxxi]の曖昧な提示を Barthold[1928：45(n. 4)]以下が誤って踏襲したに過ぎないようである。本書においても，十分な分析は行われてはいない[6 (n. 26)]。評者は，著者自筆の写本([Istanbul] Nuru Osmaniye 3207)を，宇野伸浩氏のご好意により参照する機会を得たが，当該の記述の箇所(f. 242b)には，この著作集がやはり「*Ǧāmiʿ a[l]-Taṣānīf* と名付けられ」ていると書かれている(ボンベイ版には欠けている)。

6) *Maǧmūʿa* ペルシア語版：[Tehran] Kitābxāna-yi Salṭanatī 863 / *Tauḍīḥāt* アラビア語版：[Istanbul] Selimağa 785<716年ムハッラム月(-1316. 4. 24.)末タブリーズの al-Ḥakamīya マドラサで書写[35]>；[Istanbul] Ahmet III 2322<715年ムハッラム月(-1315. 5. 6.)末バグダードの al-Ġāzānīya マドラサで書写[38]>/ *Sulṭānīya* アラビア語版：[Istanbul] Fatih 3896<後世の写本[17 (n. 22)]>/ *Laṭāʾif al-Ḥaqāʾiq* ペルシア語版：[Tehran] Kitābxāna-yi Malik 1281<この作品の刊本(ed. Ġulāmriḍā Ṭāhir, 2 vols., Tehran 2535/1975, 2537/1977)の底本のひとつ[19 (n. 31, 34)]>/ *Asʿila wa Aǧwiba* アラビア語版：[Istanbul] Pertev Paşa 229<1245年ラジャブ月20日(1830. 1. 15.)書写[45]>；ペルシア語版：[Tehran] Kitābxāna-yi Millī F2351<不完全な後世の写本[45 (n. 13)]>/ タクリーズのみ：[Istanbul] Fatih 3725<本来 *Tauḍīḥāt* の冒頭部分であったもの[13, 32]>；[Wien] (Orientakademie) no. cxlviii<[22, 32]>；[Paris] Bibl. Nat., Ancien fonds persan 107<この「タクリーズ集」は707年シャウワール月(1308年4月)にタブリーズで ʿAbd al-Azīz b. Muḥammad b. Maḥmūd Kirmānī なる人物によって書写された *Laṭāʾif al-Ḥaqāʾiq* の写本から書写され，17世紀初頭の写本に合本されているという[33](注12参照)>。このうちテヘラン所在の写本は，革命のため調査の中断を余儀なくされ実際の調査はできなかったようである[12 (n. 3)]。また，Togan[1964：711]，Bregel[1972：304]が記載するペルシア語版 *Asʿila wa Aǧwiba* のエディルネ所在の写本は発見できなかったという[46]。

7) このことから，後に個々の部分がまとめられ構成されるにいたった写本と結論づけている[15]。一方，タクリーズはすべて707年の日付を有し，それを書写したものであるとされている[13]。

8) フルネームは，f. 89a, 99a 等に見られるという[12]。"zūdniwīs" とは「速く書く者」の意味である。職業的な書写生を予想させる「あだ名」といえる。Muḥammad b. al-ʿAfīf al-Kāšī とともに，この写本の飾り葉の作者でもあった[12]。Blair[1984：82, 89 (n. 79)]は，Ibn al-Fuwatī が705年に出会ったラシードの挿絵画家がこの後者であったと考えている。

9) タクリーズを献じた学者のリストに上げられている人物に関しては，そのリスト番号をこのような形で記すことにする。同時代人であることを示す。

10) *Bayān al-Ḥaqāʾiq* の唯一発見されている写本である。ただし，ペルシア語の詩をそのまま記載しており，著者はペルシア語からの翻訳と位置付けている。

11) 『ワクフ文書』の証人の一人，Muḥammad b. Saʿīd al-Kātib[WRR / txt：27]と同一人物であるこ

とが示唆されている。

12)　未調査のテヘラン所在のもの以外では，注6のイスタンブル所在の2写本と注3に示した *Taudīḥāt* の写本以外に，*Taudīḥāt*：[Istanbul] Kılıç Ali Paşa 835（アラビア語）＜最下限713年シャウワール月（1314. 1. 19. -）初めの書写の日付をもつ（Jahn 1964：118の707年完成の記述を訂正）[38]＞/ *Sulṭānīya*：[旧 Leningrad] 3929（C 375）（ペルシア語）＜715年ズルカァダ月（1316. 2.）に完成。2つの補遺をもち，第1の補遺は716年シャウワール月（1317. 1.）に書写。第2の補遺は707年シャウワール月（1308. 4.）に ʻAbd al-ʻAzīz b. Muḥammad b. Maḥmūd Kirmānī により執筆されたものの写しで，この人物はケルマーンのカーディーであり，同707年自らタクリーズを献じるとともに（=A86）上記の日付で *Laṭāʼif al-Ḥaqāāʼiq* の書写もしている（注6参照）[17, 32, 33]＞/ [Oxford] Bodleian 2792（ペルシア語）＜これまでの記述を確認[17-18]＞/ *Asʼila wa Ağwiba*：[Istanbul] Aya Sofya 2180（ペルシア語）＜716年ジュマーダーⅠ月20日（1316. 7. 10.）に Muḥammad b. ʻAlī b. Muḥammad al-Šīrāzī なる人物が Muḥammad b. ʻAbd al-Malik b. ʻAbd al-Karīm なる人物が書写した写本より書写[45]＞。最後の写本はラシードの同時代にラシードの意向と関わりなくラシードの著作が書写されていたことを示す。

13)　上記（注5）に紹介した『ワッサーフ史』の記述に基づく。

14)　注12参照。なお，注3参照。

15)　評者は，ペルシア語版[Istanbul] Nuru Osmaniye 3415の，この箇所に当たる部分[ff. 370a-444b]を，井谷鋼造・宇野伸浩両氏の将来されたマイクロフィルムによって参照することができた。記して謝意を表したい。各歴史は，名前だけを列挙する形で書かれ，系図はそこでは ff. 432b-444b に見ることができる。

16)　ここでの考えに基づくのであれば，先に献呈された3巻には「地理書」が入ることになるが，著者は慎重で結論を下さない。しかし，「系譜集」の成立が707年以降であるならば，『ワッサーフ史』の記述からその最終版は712年にまとめられたものとなり，例えば Togan 1962：70；杉山 1987：29が示す，現存 *Šuʻab-i Panğgāna* と『集史』第1巻本文との相違の一部は，理解できることになる。

17)　このテーマに関しては，Melville 1990があるが，やはり本書を利用しておらず，本書によって増補することが可能である。

18)　現存『集史』第2巻の，同時代かつラシードと直接関係があると考えられる写本[Istanbul] Hazine 1654（ペルシア語）と[London]旧 Royal Asiatic Society A. 27（現 Nour Collection 所蔵，注27参照）（アラビア語）の「インド史」の末尾には，*Miftāḥ al-Tafāsīr* 第1 qism 第5論文 *Fī al-baḥṯ al-wāqiʻ baina al-muslimīn wa ahl al-kitābain wa ahl al-tanāsux* と題された反輪廻思想の論文[16]が引用されている[Jahn 1965：xv（n. 24），85-94, 41-48]。反輪廻思想に関しては，その『集史』「インド史」本文末尾にも反輪廻思想の論文を書くことが予告されている（ただし，そこでは *Taudīḥāt* に収録するとしている）。さらに，『ワッサーフ史』が示す著作集の中には，「霊魂の再生

[を信じる] 諸宗派を無効にすることとそれらを廃すること(ibṭāl-i maḏāhib-i tanāsux wa nāsix-i īšān)」に関する独立の書がある[TW / txt：539](現在まで対応する書名は知られていない)。このように反輪廻思想は,『集史』を含めラシードにおける一つのテーマであったといえ,流入する知識を受け入れる側の主体性を無視することはできない。

19) 上注で示した反輪廻思想の論文の冒頭で,ラシードは,「[この問題に関して] イスラムのウラマーや思弁神学の学者(ḥukamā-yi kalām)がこれまで説明し論じてきたが,我々は,繰り返しと多弁を避けるため彼らの説を引用しなかった(mā suxanān-i īšān na-yāwardīm)」(ペルシア語版より引用[Jahn 1965：85, ll. 19-20](アラビア語版[Jahn 1965：41, ll, 14-15]))と自ら明記している。

20) 本書では政治的な背景に関しては,ほぼ B. Spuler, *Die Mongolen in Iran,*[2]Berlin 1955のみに依っており,この点も配慮の足りない点といえる。

21) Quatremère が示したテキストが,現存ワクフ文書に確認されることにより,この「写本作成指示書」の史料的な信用性・価値は極めて高いものになったといえる。

22) この他でも,現存文書の証人記名の最下限の日付を誤って示しており(785年)[4 - 5 (n. 21)](実際は809年付けまで[WRR / txt：24, 25])。また,テキスト1と2に関して校訂本にのみよってその順に関して混乱が見られる[3 (n. 12)]。

23) 『書簡集』の偽書説は,ほとんど説得力をもたなかったにもかかわらず,Levy[1946]の提唱以来根強く残っている[cf. Morgan 1982：123(n. 43)]。『書簡集』の真贋問題に関しては,旧ソ連の学界において史料として利用され続けたことは周知のことであるが,『ワクフ文書』の出版によって両者の齟齬が明らかになり,改めて偽書説が出されていた [Rice-Gray 1976：32(n. 3)]。この説は Blair[1984：88(n. 5)]によっても留意され『書簡集』は参照されていない。新たに問題とされた両史料間の齟齬は,ラブエ・ラシーディーの職員数である(例えばハーフィズの数では『ワクフ文書』24名[WRR / txt：135 ; Blair 1984：80, 86]であるのに対して『書簡集』200名[MR：318])。しかしながら,ワクフの規定と関係なく職員の数が膨れ上がる例は,マムルーク朝下のダマスクス,al-Šāmiyya al-Ǧuwāniyya マドラサにも見られ,Lapidus[1967：75]の報告によると,法学者に関し規定では20名であったにもかかわらず,1327年の調査時には190名が雇われていたという。職員の増加は,それ自体究明すべき歴史事象であり,史料の真贋を決定する根拠にはならない。現在提出されている『書簡集』の偽書説は根拠がない。なお,van Ess[1978]は重要な史料として『書簡集』を用いている。さらに,Gronke 1993 : 25(n. 119)を参照。

24) 『ワクフ文書』補遺「写本作成指示書」では「元になる写本(nusxa-yi aṣl)」とそれに基づいて作成される写本の紙として規定されており "qaṭ'-i ḥāl-i buzurg-i Baġdādī"[WRR / txt：238],写本に付されたその写しでは "qaṭ' kabīr Baġdādī"[Quatremère：clxviii],『ワッサーフ史』の著作集編纂の記事においては "qaṭ'-i Baġādida"[TW / ms：242b ; cf. / txt：538-39]と表記される。

25) このコーランを紹介する James の論文は,Blair 1984：89(n. 77)で *Islamic Art* 1への掲載予告

がなされていたが，結局論文としては公表されなかったらしく，James 1988：127-31で紹介されている。Cat. no. 46（[Istanbul] Emanet Hazinesi 248），判型は52×37cm。

26) ここで認定された写本は以下のものであるが，『集史』の写本に関しては，美術史のこれまでの説を無批判に受け入れたものであり，注意が必要である。*Maǧmū'a* パリ写本／コーラン[James 1988：no. 46]／『集史』ペルシア語版[Istanbul] Hazine 1653／同 1654／『集史』アラビア語版[Edinburgh] University Library 20／同[London] Nour Collection ex-Royal Asiatic Society。『集史』ペルシア語版写本に関しては，Karatay 1961：38, 393；Jahn 1969：11, 13；1977：23等を参照（特に Hazine 1653は714年書写の部分を含みティムール朝期に現在の形になったとされている）。アラビア語版写本に関してはとりあえず，Rice-Gray 1976；Gray 1978参照（エディンバラ写本の書写年706年は疑問である[van Ess 1981：7 (n. 33)]。旧 Royal Asiatic Society 所蔵の写本に関しては，Blair が分析の発表を予定しており[Blair 1993：274 (n. 29)]，期待される）。なお，注18も参照。

27) 「バグダード紙大判」の規格に関して，ラシード以降の記述とはいえ，カルカシャンディー al-Qalqašandī (d. 1418) の百科事典の記述により史料上に情報を得ることができる（後藤裕加子氏によりご教示いただいた。記して謝意を表する）。そこでは，「バグダード紙」が紙の種類で一番上質で[ṢA II：487；cf. 藤本 1963：39-40]，かつ「完全なバグダード紙の判型（qaṭ' al-Baġdādī al-kāmil）」は紙の9つの判型のうち最大であり，「二つ折（darǧ）」の（現在の考え方での）縦が「ミスルの織物のズィラーァ（ḏirā'）」で1ズィラーァ，横が折りを延ばして1.5ズィラーァあるという[ṢA VI：190]。ズィラーァは腕尺であり，参考程度の数値に過ぎないが Hinz [1955：56] の算定によれば，約58cmで，これに基づけば1ページ大58×43.5cmの計算になる。*Maǧmū'a* パリ写本は52×36cm [de Slane 1883-95：407] であり，綴代と製本時のカットを考慮すればこの判型を目安にできることになる。ただし，後世のカットを考えた場合，筆記面に関する留意も必要であろう。Blair [1993：270] は，上記の『集史』の「典型的な筆記エリア」は36×25cmであるとしている。

文 献 表

一次史料（略号表）

ǦT I : Rašīd al-Dīn, *Ǧāmi' al-Tawārīx*, I- 1 , Москва 1968.

MR : *Mukātabāt-i Rašīdī*, ed. Kh. B. M. Shafī', Lahore 1947.

Quatremère : Quatremère 1836 : cxlvii-clxxv (Appendice).

ṢA : al-Qalqašandī, *Ṣubḥ al-A'šā fī Ṣinā'a al-Inšā*, 14 vols., al-Qāhira 1963 (reprint of 1913-22).

TW : Šihāb al-Dīn 'Abd-allāh Širāzī (Waṣṣāf), *Tārīx-i Waṣṣāf*.

/ ms : [Istanbul] Nuru Osmaniye 3207.

/ txt : ed. Bombay 1269/1853. (reprint : Tehran 1338/1959)

WRR :

/ ms : *al-Waqfiyya al-Rašīdiyya,* facsimile ed., Tehran 1350/1972.

/ txt : *Waqf-nāma-yi Rab'-i Rašīdī,* eds. Mīnuwī, M. & I. Afšār, Tehran 2536/1978.

二次文献

Barthold, W.

1926 Иран. Исторический обзор, *Сочинения,* Ⅶ, москва 1971. [初版：Ташкент 1926].

1928 *Turkestan Down to the Mongol Invasion,* London.[4 th ed. 1977].

Blair, S. S.

1984 Ilkhanid Architecture and Society : an Analysis of the Endowment Deed of the Rab^{c}-i Rashīdī, *Iran* 22.

1993 The Development of the Illustrated Book in Iran, *Muqarnas* 10.

Bregel, Yu. E.

1972 *Персидская литература,* Москва.

Browne, E. G.

1908 Suggestions for a complete edition of the Jámi' u't-Tawáríkh of Rashíd u'd-dín Faḍlu'lláh, *JRAS.*

1928 *A Literary History of Persia,* Ⅲ, London.(reprint(with change of title) of 1902 ; reprint 1984)

van Ess, J.

1978 Das Todesdatum des Baiḍāwī (Biobibliographische Notizen zur islamischen Theologie, 2), *Die Welt des Orients* 9.

1981 *Der Wesir und seine Gelehrten —— Zu Inhalt und Entstehungsgeschichte der theologischen Schriften des Rašīduddīn Faẓlullāh (gest. 718 / 1318),* Wiesbaden.

Gray, B.

1978 *The World History of Rashid al-Din. A Study of the Royal Asiatic Society Manuscript,* London.

Gronke, M.

1993 *Derwische im Vorhof der Macht,* Stuttgart.

Hinz, W.

1955 *Islamische Masse und Gewichte,* Leiden.

本田實信

1969 イスラムとモンゴル,『岩波講座世界歴史 8 中世 2 西アジア世界』, 岩波書店. [「モンゴルとイスラム」として本田 1991に再録]

1984 『ラシード全著作目録』について,『西南アジア研究』23. [「『ラシード全著作目録』」として本田 1991に再録]

1991 『モンゴル時代史研究』, 東京.

藤本勝次

1963 製紙法の西伝, 『泊園』 2 .

岩武昭男

1991 本田 1991の書評, 『オリエント』34.

1992 ガザン・ハンのダールッスィヤーダ(dār al-siyāda), 『東洋史研究』50.

Jahn, K.

1964 The Still Missing Works of Rashīd al-Dīn, *CAJ* 9 .

1965 *Rashīd al-Dīn's History of India,* The Hague.

1969 *Die Geschichte der Oġuzen des Rašīd ad-Dīn,* Wien.

1977 *Die Frankengeschichte des Rašīd ad-Dīn,* Wien.

1982 van Ess 1981の書評, *Der Islam* 59.

James, D.

1988 *Qur'āns of the Mamlūks,* London.

Karatay, F. E.

1961 *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Farsça Yazmalar Kataloğu,* Istanbul.

Krawulsky, D.

1978 *Īrān-Das Reich der Īlḫāne,* Wiesbanden.

Lapidus, I. M.

1967 *Muslim Cities in the Later Middle Ages,* Cambridge, Mass..

Levy, R.

1946 The Letters of Rashīd al-Dīn Faḍl-Allāh, *JRAS.*

Melville, Ch.

1990 The Itineraries of Sultan Öljeitü, 1304-16, *Iran* 28.

Morgan, D.

1982 Persian Historians and the Mongols, *Medieval Historical Writing in the Christian and Islamic Worlds* (ed. by D. O. Morgan), London.

1986 *The Mongols,* Cambridge, Mass..[杉山正明＋大島淳子訳, 『モンゴル帝国の歴史』, 角川書店 1993]

Muginov, A. M.

1958 Персидская уникальная рукопись Рашид ад-Дина, *УЗИВ* 16.

Quatremère, É.

1836 *Raschid-eldin, Histoire des Mongols de la Perse,* Paris.(reprint : Amsterdam 1968).

Rice, D. T-Gray, B

1976 *The Illustrations to the 'World History' of Rashīd al-Dīn*, Edinburgh.

Rosenthal, F.

1981 "Blurbs"(Taqrīẓ) from Fourteenth-Century Egypt, *Oriens* 27/28.

de Slane

1883-95 *Catalogue des manuscrits arabes* (Bibliothèque Nationale), Paris.

杉山正明

1987 西暦1314年前後大元ウルス西境をめぐる小札記,『西南アジア研究』27.

Togan, A. Z. V.

1934 Islam and the Science of Geography, *Islamic Culture* 8.

1962 The Composition of the History of the Mongols by Rashīd al-Dīn, *CAJ* 7.

1964 Reşîd-üd-Din Tabîb, *Islâm Ansiklopedisi* 9.

本会記事

西南アジア研究会総会

1993年度総会は,先の会告のごとく,1993年12月11日午後2時から,京都大学文学部博物館会議室で開かれた。

小野山節会長の挨拶に続いて議事に入った。まず大江節子委員から,会誌発行状況,会員数,会計等の会務についての報告が行われ,ついで,勝藤猛監事から会計が適正に処理されている旨の報告があった。

総会議事の後,関西学院大学教授小玉新次郎氏に,「パルミラの遺跡」と題してご講演いただき,最後に前川和也委員の閉会の挨拶をもって終了した。

西南アジア研究 **第40号** 1994年3月25日印刷 1994年3月31日発行
編集兼発行者 京都大学文学部内 西南アジア研究会 代表者 小野山節(会長)
年会費 維持会員20,000円,一般会員(大学院生を含む)6,000円,学生会員(学部在学者)4,000円
振替口座 01080-7-19867 印刷者 京都印刷紙工株式会社 京都市伏見区毛利町6